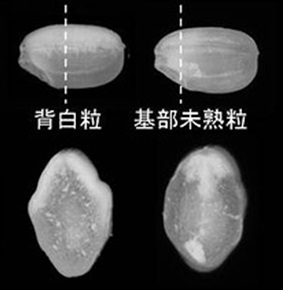
◆**新潟県　平成22年産米品質低下の状況について**

　新潟県産の平成22年産米の１等級比率は、うるち玄米21.1 ％、コシヒカリ21.1 ％(平成23年１月末現在)で、全国平均や他の米主産道県と比較して低く、過去最低の１等米比率となった。最終的には水稲うるち米１等米比率が20％となり２等米以下の格落ち理由は背白粒及び基部未熟粒の多発生が特徴的であった。このため、専門家等による「平成22年産米の品質に関する研究会」を平成22年11月に立ち上げ、要因分析及び次年度以降の対策について検討を行った。

**◆平成22年産米の品質に関する研究会報告の概要**

＜気象について＞

　これまでの知見では、最高気温が32℃、平均気温が27～28℃、最低気温が23～24℃を超えると白未熟粒の発生が助長されるとされている。

　2010年（平成22）は、出穂期から20日間の新潟市の最高気温は32.8℃、平均気温は28.9℃、最低気温は25.7℃となるなど、登熟期に連続した高温となった。

　また、連続無降雨日数が16日以上の地域では品質が低下する傾向が見られ、無降雨日数の長さも品質低下を助長したものと考えられた。

＜稲体の栄養状態＞

　2010年は、幼穂形成期以降、急激に葉色が低下し、稲体の活力が低下していたことが推察された。この稲体活力の低下により、本年のような高温年では、出穂期前の同化産物の蓄積不足や登熟期の同化産物の消耗・光合成能力の低下・転流抑制などを助長し、白未熟粒等の多発生を招いたと考えられた。また、稲体活力を低下させる原因として、

・浅い作土深や中干しの長期化により根域が縮小し、根の養分吸収力が低下した

・５月中旬の低温・日照不足による分げつ（根元付近から新芽が伸びて株分かれする事）の抑制や、梅雨入り後の高温・日照不足による長草化で倒伏が懸念され、１回目の穂肥の施用ができなかったこと等が推察された。

＜今後の対策＞

　根域の拡大につながる作土深の確保等による土づくりや、葉色の推移等による生育診断に基づいた穂肥施用などを基本技術へと反映させるとともに周知・徹底を図る。また、高温時の緊急対策として、緊急時の迅速な生育診断や情報提供の体制を整備する。

技術・品種開発面では、高温条件等に対応する生産技術の開発や高温耐性をもつ新品種を開発し、気象変動に対応できる取組を進める。